Water Structure at the "Buried" Silica Interface Studied with Heterodyne-Detected Vibrational Sum-Frequency Generation

<u>Anton MYALITSIN</u>¹, Shu-hei URASHIMA¹, Satoshi NIHONYANAGI^{1,2}, Shoichi YAMAGUCHI³, Tahei TAHARA^{1,2}

¹ Molecular Spectroscopy Laboratory, RIKEN

² Ultrafast Spectroscopy Research Team, RIKEN Center for Advanced Photonics

³ Department of Applied Chemistry, Faculty of Engineering, Saitama University

Heterodyne-detected vibrational sum-frequency generation (HD-VSFG) spectroscopy is a powerful tool to study the interfacial boundary between two materials. Over the last years, we have employed HD-VSFG in a variety of experiments to investigate the molecular properties at liquid surfaces exposed to the air by measuring the complex second-order nonlinear susceptibility $\chi^{(2)}$ [1]. The imaginary part of the $\chi^{(2)}$ spectrum is directly comparable to the linear absorption spectrum in the bulk. Furthermore, the sign of the imaginary $\chi^{(2)}$ provides information about the up/down orientation of the interfacial molecules. However, application of HD-VSFG to the buried solid/liquid interface over a wide frequency range has not been achieved so far.

In a previous study, we measured the $\chi^{(2)}$ spectrum of silica/water interface in the CH stretch region using the CH resonance as a phase reference [2]. A 150 nm thick gold film, evaporated on a part of the fused silica substrate was used as



Figure 1: a) Schematic of the fluid cell. b) Schematic of the VSFG setup.

an intermediate reference. The phase of the silica/gold reference was determined by comparing the resonant $\chi^{(2)}$ spectrum from the silica/ODS/air interface with the air/ODS/silica interface. However, this approach is applicable only to the CH stretch frequency region. In this study, we report a method to obtain complex $\chi^{(2)}$ from the "buried" spectra solid/liquid interface in a wide frequency region without relying on a resonant signal.

The spectra were recorded in a home-built fluid cell (Figure 1). Water can be filled and exchanged with a syringe, without opening the cell. To obtain the correct phase of the complex $\chi^{(2)}$, we used the nonresonant SFG signal from the "buried" silica/air interface as a reference, i.e. focusing the ω_1 and ω_2 beams at the lower surface of the silica substrate in the empty cell. To avoid the effect of OH resonance due to adsorbed water, SFG spectra of silica/air were measured in D₂O saturated air. Therefore the silica/air signal is completely nonresonant and real.

To confirm the validity of the use of silica/air interface as a reference, we used perfluorohexane (C₆F₁₄) as a sample. Since C₆F₁₄ shows no absorption near the OH stretch region, we can reasonably expect $\chi^{(2)}$ of the silica/C₆F₁₄ interface is nonresonant. The observed $\chi^{(2)}$ spectrum of C₆F₁₄ was real and constant, verifying the validity of the measurement.

As a model "buried" interface, we measured the silica/water interface. We observed a positive imaginary $\chi^{(2)}$, indicating an up-orientation of the water molecules (figure 2). This is consistent with a partially negatively charged silica surface.



Figure 2: Complex $\chi_{eff}^{(2)}$ spectrum of the silica/water interface. This spectrum was normalized by $\chi_{eff}^{(2)}$ of the silica/air interface, because it is a positive real constant in the present wavenumber range. The sum-frequency $\omega_1 + \omega_2$, visible ω_1 , and IR ω_2 lights were S-, S-, and P-polarized, respectively.

References:

Nihonyanagi, S.; Mondal, J.; Yamaguchi, S.; Tahara, T., Ann. Rev. Phys. Chem., **2013**, *64*, 579.
Myalitsin, A.; Nihonyanagi, S.; Yamaguchi, S.; Tahara, T., 7th JSMS Meeting, **2013**, (1P069).

時間分解 HD-VSFG を用いた free-OH 励起による 空気/水界面の超高速振動ダイナミクスの観測

(¹理研・田原分子分光、²理研・光量子工学領域) ○井上賢一¹、Prashant C. Singh¹、二本柳聡史^{1,2}、山口祥一^{1,2}、田原太平^{1,2}

Ultrafast vibrational dynamics at air/water interface with free-OH excitation using time-resolved HD-VSFG

(¹Mol. Spec. Lab., RIKEN, ²RAP, RIKEN) OKen-ichi Inoue¹, Prashant C. Singh¹, Satoshi Nihonyanagi^{1, 2}, Shoichi Yamaguchi^{1, 2}, and Tahei Tahara^{1, 2}

【序】水は分子間水素結合による水素結合ネットワークを形成するが、界面においては水素結合 ネットワークが途切れるため水分子の環境はバルクと大きく異なる。その結果、バルクの水の OH 伸縮振動領域の赤外吸収スペクトルには 3400 cm⁻¹を中心に 1 つのバンドしか現れないのに対し て、空気/水界面においてヘテロダイン検出振動和周波発生分光法(Heterodyne-Detected Vibrational Sum Frequency Generation; HD-VSFG)を用いて測定した OH 伸縮振動領域の Img⁽²⁾スペクトルには、2 つの正のバンドと 1 つの負のバンドが観測される¹。Img⁽²⁾スペクトル の高波数の正のバンド(中心: 3700 cm⁻¹)は最表面の水の空気側に突き出した水素結合をしてい ない OH 伸縮振動(free-OH)、負のバンド(中心: 3450 cm⁻¹)はバルクとほぼ同じ強さで水素 結合した OH 伸縮振動(水素結合 OH)、低波数の正のバンド(中心: 3200 cm⁻¹)は界面に特異 的な強く水素結合した水のペアの OH 伸縮振動に帰属することができる。このように、空気/水界 面はバルクと環境の異なる水分子の存在する不均一な系である。特に、界面とバルクの水の違い を理解する上で、界面にしか存在しない free-OH を振動励起した場合のダイナミクスは非常に興 味深い。

界面選択的な振動和周波発生分光法を用いたダイナミクス測定において、複雑な過渡スペクト ルを直接的に議論するにはヘテロダイン検出が不可欠である。我々のグループは、時間分解 HD-VSFGを2次元分光に拡張した2次元 HD-VSFGを用いた空気/水界面の超高速振動ダイナミ クスの測定に世界に先駆けて成功している²。その結果、free-OH を含む高波数側を赤外励起した 場合、遅延時間 0.0 ps において、free-OH の v=1 ← v=0 遷移のブリーチだけでなく、水素結合 OH、 強く水素結合した OH 伸縮振動の v=1 ← v=0 遷移のブリーチも観測されている。このことは、3 種類の OH 伸縮振動が強く結合していることを示唆している。しかし、この測定においては、励 起赤外光はその広いバンド幅のため free-OH だけでなく水素結合 OH も同時に振動励起している。 そのため、free-OH のみを選択的に振動励起した場合のダイナミクスは明らかになっていない。 今回、free-OH のみを選択的に振動励起し、OH 伸縮振動領域に誘起される過渡的な変化(ΔImχ⁽²⁾) を時間分解 HD-VSFG で測定したので報告する。 【実験】可視光 (中心波長 795 nm、バンド幅 25 cm⁻¹、パルス幅 0.5 ps) と赤外光 (中心波数 3600 cm⁻¹、バンド幅 300 cm⁻¹、パルス幅 0.1 ps) を y-cut quartz (厚さ 10 µm) と試料 (H₂O、抵抗 率 18.2 MΩ cm) に集光し和周波を発生させた。y-cut quartz からの和周波を局所発振 (Local Oscillator; LO) 光として用い、ガラス板 (厚さ 2 mm) を透過させて、試料からの和周波に対し て 3.5 ps 遅らせた。これらの和周波の干渉を検出することでヘテロダイン検出を行った。さらに、励起赤外光 (中心波数 3740 cm⁻¹、バンド幅 100 cm⁻¹、パルス幅 0.2 ps) を試料に集光し、遅延 時間を変えながら測定することで時間分解測定を行った。また、和周波光、可視光、赤外光、励 起赤外光は各々S⁻、S⁻、P⁻、P⁻偏光とした。

【結果と考察】図1に、測定された時間分解 HD-VSFG スペクトルを示す。合わせて示す励起赤 外光のスペクトルからわかるように、励起赤外光の中心波数を高波数側にシフトさせることでよ り選択的な free-OH の振動励起を実現した。遅延時間 0.0 ps においては、3720 cm⁻¹を中心とす る負の信号と 3560 cm⁻¹を中心とする正の信号が観測された。負の信号は励起した free-OH の v=1 ←v=0 遷移のブリーチに帰属できる。正の信号は、赤外励起で生成した free-OH の振動励起状態 の信号 (v=2←v=1 遷移)を含むが、ブリーチに比較して著しく幅が広いので、水素結合 OH の

高波数側のブリーチも寄与してい ると考えている。正の信号の幅は遅 延時間 0.3 ps になると水素結合 OH の伸縮バンド全体に広がって おり、この時点では広い振動数領域 の水素結合 OH のブリーチが観測 されていると考えられる。OH 伸縮 振動の振動数は水素結合の強さを 反映し、水素結合は弱いほど振動数 が高い。今回得られたデータは、 free-OH は励起直後にすべての振 動数領域の水素結合 OH と強く結 合しているわけではなく、励起直後 には結合しているとしても高い振 動数を持つ水素結合 OH のみで、 これが数百フェムト秒の時間スケ ールで OH 伸縮振動全体へ拡散す ることを示唆している。



図 1: 空気/水界面における定常状態スペクトル、励起赤外 光スペクトル、時間分解 HD-VSFG スペクトル(遅延時間 は上から-1.0 ps, 0.0 ps, 0.1 ps, 0.3 ps, 0.5 ps)

【参考文献】[1] S. Nihonyanagi, T. Ishiyama, T. Lee, S. Yamaguchi, M. Bonn, A. Morita, and T. Tahara, *J. Am. Chem. Soc.* **133**, 16875 (2011). [2] P. C. Singh, S. Nihonyanagi, S. Yamaguchi and T. Tahara, *J. Chem. Phys.* **139**, 161101 (2013).

X線・中性子回折法を用いた制限空間内における

水--エタノール2成分系の分子間構造の検討

(信州大・理¹, KEK 物構研²)

 ○吉元 政嗣¹, 飯山 拓¹, 牧野 浩之¹,浜崎 亜富¹, 尾関 寿美男¹, 大友 季哉²
Investigation of intermolecular structure of confined binary mixture water and ethanol by XRD and ND (Shinshu Univ.¹, KEK²)
○Masatsugu Yoshimoto, Taku Iiyama, Hiroyuki Makino, Atom Hamasaki, Sumio Ozeki, Toshiya Otomo

【諸言】2 成分系をはじめとした混合系の物性はさまざまな系で検討が行われているが、系の『大き さ』による影響は未だ十分に解明されていない。Nishi らは分子線を用いて水・エタノール混合系の分 子クラスターについて検討し、エタノールが 2 mol%である時に水がエタノールのクラスターを包接し ている構造になっていることを明らかにした。活性炭やメソポーラスシリカなどの多孔体に含ま れる制限空間内の分子間構造は、壁(細孔壁)からのポテンシャルの影響と空間的な制限により、バ ルク状態とは異なることが知られている。本研究では、X 線回折(XRD)を用いることで制限空間内の混 合溶液中の C, O 原子に関係する構造を、さらに中性子回折(ND)を用いて水素(D)原子に関係する構造 を測定した。ハイブリッドリバースモンテカルロ(HRMC)法を測定した構造因子(*S(Q)*)に適用し、制限 空間内の 2 成分混合系の詳細な分子間構造の検討を行った。

【実験】XRD 測定には、H₂O(milli-Q 水)(日本メルクミリポア(株)], C₂H₅OH(99.5 wt%)(和光純 薬工業試薬(株)を、ND 測定には、D₂O (Cambridge Isotope Laboratories, Inc.), C₂D₅OD(Cambridge Isotope Laboratories, Inc.)を吸着質として用い、ピッチ系活性炭素繊維 A 10(細孔径(*h*): 0.80 nm) (アドール(株)を吸着媒として用いた。A 10 を 383 K, <1 mPa で前処理し、水モル分率(χ_{water} : 0, 0.3, 0.6, 0.9, 1.0)の混合溶液について細孔が満たされている状態のサンプルをあらかじめ調製 しておき、XRD・ND 測定を行い制限空間内の分子間構造の情報を得た。XRD 測定は、 RINT-Ultima III(Rigaku)で行った(λ =0.710730 Å,積算時間: 3h,測定温度: RT)。ND 測定実験は、 J-PARC(茨城県東海村)内の物質・生命科学実験施設(MLF) BL-21(NOVA)で行った(積算時間:3h, 測定温度: RT)。HRMC 法の分子間相互作用は、6,12-Lennard Jones potential と Coulomb force を用いた。^{[1]~[5]}吸着系のシミュレーションでは、セル c 軸方向に Steele's 10-4-3 potential を課 してシミュレーションを行った。

【結果と考察】測定した吸着状態の ND のXwater の 変化における構造因子: S(Q)を Fig.1 に示す。Q= 1.7 Å⁻¹付近のメインピーク位置を Bragg の式を利 用して d に変換し同モル分率のバルクの値と比較 した(Fig. 2)。水が多い状態では、バルク状態に比 べdが大きくエタノールが多い状態では逆に小さ くなっていることが分かる。これは XRD・ND ど ちらの結果でも同様の結果となった。S(Q)をフー リエ変換して、動径分布関数(RDF)を求めた。得ら れた RDF を Fig.3 に示す。吸着状態の RDF の振幅 がバルク状態よりも大きいことから、バルク状態 より疎密がはっきりとした分子間構造になってい ることが分かる。S(Q)のピーク位置の変化に表れ ていたように、Xwater が大きくなるとバルク状態と 比較して、平均分子間距離が大きくなっているこ とが分かる。 $\chi_{water} = 0.3, 0.6, 0.9$ において r = 0.5 nm 付近までの局所的な分子間構造は、エタノール・ 水それぞれ純成分(Xwater:0, Xwater: 1.0)の時の特徴を 残していることが分かった。NDの S(Q)を基にバ ルク状態と吸着状態の HRMC を行った。バルク状 態,吸着状態ともに実験値をよく再現していた。 HRMC 法により決定した分子配置を用いて、バル ク状態と制限空間内における2体分布関数:g(r)を 用いて分子間構造を詳細に検討する。



Fig.3 Xwater の変化における動径分布関数

- [1] Michael W. Mahoney, William L. Jorgensen J. Chem Phys., Vol 112, No. 20, 2 May 2000
- [2] Marke Freindorf, Yihan Shao, Thomas R. Furlani, Jing Kong J. Comput Chem., 26: 1270–1278, 2005
- [3] William L. Jorgensen J. Phys. Chem. 1986, 90, 1276-1284
- [4] William L. Jorgensen, Jeffry D. Madura, and Caro, J. Swenson J. Am. Chem. Soc. 1984, 106, 6638-6646
- [5] Bin Chen, Jeffrey J. Potoff, and J. Ilja Siepmann J. Phys. Chem. B 2001, 105, 3093-3104

カーボンナノチューブ中の水の特異構造形成

(千葉大院・理) ○大場 友則 Size-dependent water structure in carbon nanotubes (Chiba Univ.) ○Tomonori Ohba

【序】 疎水性界面における水の挙動は種々の化学反応や生化学活性の発現に 強く影響を及ぼす。 特に疎水性ナノ空間において水は疎水性表面とは異なり 比較的低い水蒸気圧で凝縮することが知られているが、その挙動は十分には明 らかとなっていない。 カーボンナノチューブはカーボンのみで構成された1 次元の疎水性ナノ空間を有しているため、疎水性ナノ空間の水挙動を調べるの に適している。¹ カーボンナノチューブ中で高圧下において特異な水リング構 造が発現することが分子動力学シミュレーションにより示されている。² この ような中で我々は室温におけるカーボンナノチューブ中の水の特異なクラス ター構造の発現や高速輸送機構の解明について報告してきた。³⁻⁵ 本研究では カーボンナノチューブのチューブ径に依存した水の集合構造について報告す る。⁶

【実験】 本研究では4種類の直径の異なるカーボンナノチューブを用いた; HiPCO 法によって合成されたカーボンナノチューブ (Unidym Inc.)、Super Growth 法によって合成されたカーボンナノチューブ (Hata Group)、2種の一 般的な化学蒸着法によって合成されたカーボンナノチューブ (NanoLab Inc.)。 ⁷ 今後、下記実験により得られたチューブ径から 1nm-、2 nm-、3 nm-、5 nm-CNT と呼ぶ。 カーボンナノチューブの平均直径を透過型電子顕微鏡観察 (JEM-2100F; JEOL Co.)、77 K での N2吸着等温線、ラマン分光 (NRS-3100; JASCO Co.)測定から求めた。 カーボンナノチューブを真空下で処理(< 0.1 Pa, 2 h)をおこなった後、303 K で水蒸気をカーボンナノチューブに吸着させた。 その後、カーボンナノチューブ中に導入された水の X 線回折を SPring-8 にて測 定をおこなった。(λ=0.1000 nm) また、モンテカルロ法によるカーボンナノ チューブ中の水分子シミュレーションをおこなった。 ここで用いたポテンシ ャルモデルとして水分子間には TIP5P モデルを水ー炭素間には Lennard-Jones ポテンシャルモデルを用いた。^{8,9}

【結果】 図1にカーボンナノチューブの透過型電子顕微鏡像、およびカーボ ンナノチューブ径分布を示す。 チューブ径分布は200本以上のカーボンナ ノチューブの内径から求めた。 ここで得られたチューブ径は窒素吸着等温線 から得られた平均チューブ径とも大まかに一致している。 Raman 散乱からは チューブ径の小さなカーボンナノチューブのみ検出することができ、1 nm-、2 nm-CNTでは2 nm以下のチューブ径に由来するピークが観察された。 これら カーボンナノチューブに水を吸着させ、X線回折を測定することで吸着した水

の構造を調べることができる。 水を吸着したカ ーボンナノチューブのX線回折パターンからカー ボンナノチューブのみのX線回折パターンを差し 引くことで吸着した水のX線回折パターンを得る ことができる(図2参照)。 第一ピークのX線回 折パターンをバルクの水のX線回折パターン、お よび 1 nm の氷を仮定したときのX線回折パター ンでフィッティングすると2nm-、3nm-CNTでは 1 nm サイズの氷のパターンに近いパターンとなり、 おおよそ80%の水が氷様の構造を形成している ことが示唆される。 よって、カーボンナノチュ ーブ中でクラスターを形成すると考えられる。 このことは分子シミュレーションを用いた解析に よっても示唆されており、2 nm-、3 nm-CNT では 水素結合数が多く、5 nm-CNT ではバルクの水と同 程度であり、1 nm-CNT では水素結合数はバルクよ りも少なくなった。

以上より、5 nm のカーボンナノチューブ中の水 はバルクと同様の構造を形成するのに対し、2-3 nm のカーボンナノチューブ中の水は著しくクラ スター形成が誘起され氷様の構造が発現する。 さらに 1 nm のカーボンナノチューブでは水素結 合数から超臨界水と同様の構造であると推測され る。 これらの結果から、カーボンナノチューブ のナノ空間サイズに応じた多様な水集合構造を形 成していることが示唆された。

【謝辞】 SPring-8 にて X 線散乱測定にご助力いただいた金博士, 辻博士, 小原博士に厚く御礼申し上げます。

- (1) Sansom, M. S.; Biggin, P. C. Nature 2001, 414, 156-159.
- (2) Koga, K.; Gao, G. T.; Tanaka, H.; Zeng, X. C. Nature 2001, 412, 802-805.
- (3) Ohba, T.; Taira, S.; Hata, K.; Kaneko, K.; Kanoh, H. RSC Adv. 2012, 2, 3634-3637.
- (4) Ohba, T.; Kaneko, K.; Endo, M.; Hata, K.; Kanoh, H. Langmuir 2013, 29, 1077-1082.
- (5) Ohba, T.; Taira, S.; Hata, K.; Kanoh, H. J. Phys. Chem. Lett. 2013, 4, 1211-1215.
- (6) Ohba, T. Angew. Chem. Int. Ed. 2014.
- (7) Hata, K.; Futaba, D. N.; Mizuno, K.; Namai, T.; Yumura, M.; Iijima, S. Science 2004, 306, 1362-1364.
- (8) Mahoney, M. W.; Jorgensen, W. L. J. Chem. Phys. 2000, 112, 8910-8922.
- (9) Yin, Y. F.; McEnaney, B.; Mays, T. J. Carbon 1998, 36, 1425-1432.





図1 カーボンナノチューブの
透過型電子顕微鏡像(a-d)と
直径分布(e)



1 nm-CNT、 (b) 2 nm-CNT、 (c) 3 nm-CNT、 (d) 5 nm-CNT

低濃度のオゾンに曝露する不飽和リン脂質分子単分子膜の構造研究

(北海道大学 · 触媒化学研究センター) ○喬 琳, 大澤 雅俊, 叶 深

Structural Characterization of the Unsaturated Phospholipid Monolayers Exposed to Low-level Ozone

(Catalysis Research Center, Hokkaido University) ^OLin QIAO, Masatoshi OSAWA, Shen YE

1. Introduction

Ozone (O_3) is a universal pollutant in the troposphere and mainly produced via photochemical reaction of nitrogen oxide (NOx) and violated organic compounds (VOC) by irradiation of ultraviolent (UV) light.¹ The concentration of O₃ in the ambient is typically a few tens of ppb.¹ Elevated levels of O₃ may become a reason to induce some diseases to the living body, such as cancer, atherosclerosis, and Parkinson's disease. Because of its high oxidation activity, O₃ has been regarded as a potential danger to the cell which is the basic functional unit of all known living organisms. Cell membrane, surrounding the living cells, plays crucial roles in the functionality of the cell. The cell membrane normally contains both saturated and unsaturated lipids, which show different stability to oxidants such as O₃. However, the influence of O₃ on the lipid molecules have been mainly investigated in high concentration range ($0.3 \sim 10$ ppm), much higher than the level in the environment.^{2,3} In the present study, the concentration of O_3 is controlled to a level close to that in normal ambient (~20 ppb). The structure and stability of model cell membranes, lipid monolayers containing single or binary components of saturated lipid and unsaturated lipids, were studied by π -A isotherm, atomic force microscope (AFM) and sum frequency generation (SFG) vibrational spectroscopy.⁴

2. Results and Discussions

A saturated lipid, dipalmitoylphosphatidylcholine (DPPC), and two unsaturated lipids, l-palmitoyl-2-oleoyl-*sn*-glycero-3-phosphochol (POPC) and 1,2-dioleoyl-*sn*-glycero-3-phosphocholine (DOPC), have been studied in the work. The single or binary mixed monolayers of DPPC, POPC and DOPC were prepared by LB method on the water surface (22°C) in a chamber under environment control. Figure 1 shows the changes in the surface area as a function of exposure time to N₂ (0 ~ 60 min) and low-level O₃ (60~400 min) at a surface pressure of 30 mN/m. All the monolayers are stable in the nitrogen environment and show only very small decreases in the initial 60 min. However, when a small amount of O₃ (~20 ppb) is introduced into the

chamber, the monolayers of unsaturated lipids, POPC and DOPC, become unstable in different ways. DOPC monolayer shows fast decays in the surface area and almost constant after a certain period (ca. 1hr). The decrease of the surface area indicates the loss of molecules from the water surface and implies that DOPC monolayer is partially decomposed by O₃ and left trace amount of residuals on the water surface.⁴ On the other hand, POPC monolayer shows a fast increase first and then a slow decay in the surface area. It implies that unlike DOPC, most of POPC oxidation products still remain on the water surface after the O₃ exposure. The different behaviors suggest that the two lipids have different oxidation mechanisms and stabilities in the low level of O₃ environment. It was also found that as DOPC is mixed with saturated lipid of DPPC in the monolayer, DOPC is selectively oxidized while its oxidation partially prohibited by the existence of DPPC.⁴

Morphology and structure of the monolayers were further characterized by AFM and SFG measurements, respectively. SFG observations demonstrated that most of the oxidative products from DOPC were dissolved in subphase and only a trace amount of oxidized lipid (oxPL-DOPC) remained to stay on the water surface.⁴ These results were consistent with those observed in Figure 1. In the case of POPC, after the C=C moieties in the unsaturated chain are attacked by O₃, the oxidized residues (oxPL-POPC) still keep to stay on the subphase surface (see Figure 2).

Detailed results and discussion will be given in the presentation.

References:

1. Finlayson-Pitts. B. J., Jr. Pitts. J. N., *Chemistry of the Upper and Lower Atmosphere: Theory, Experiments, and Applications,* Academic Press, San Diego, **2000**.

2. Wadia, Y.; Tobias, D.; Stafford, R.; Finlayson-Pitts, B., Langmuir, 2000, 16, 9321.

3. Thompson, K.; Jones, S.; Rennie, A.; King, M.; Ward, A.; Hughes, B.; Lucas, C.; Campbell, R.; Hughes, A.; *Langmuir*, **2013**, *29*, 4594.

4. Qiao, L.; Ge, A.; Osawa, M.; Ye, S. Phys. Chem. Chem. Phys. 2013, 41, 17775.





Figure 1. Stability of surface area for the DPPC, POPC and DOPC monolayers at 30 mN/m exposed to N_2 (0~60 min) and O_3 (60~400 min).

Figure 2. Possible oxidation mechanism of POPC by O₃.

Molecular dynamics analysis of organic solvent interface and nonlinear

spectroscopy in relation to batteries

(Elements Strategy Initiative for Catalysts and Batteries (ESICB), Kyoto Univ.¹, Department of Chemistry, Tohoku Univ.², Catalysis Research Center, Hokkaido Univ.³)

• Lin Wang^{1,2}, Qiling Peng³, Shen Ye³, and Akihiro Morita^{1,2}

[Introduction]

Lithium ion (Li-ion) batteries are widely used as power storage device for many applications in the past decades due to their high energy density and long cycle life. Many experimental and theoretical studies have been investigated in order to improve the performance of the batteries. Among these studies, the electrode-electrolyte interface structure has attracted more attention in recent years. During the ion transport through the interface, solvation/desolvation process directly influences the performance of Li-ion batteries. However, the detailed mechanism of solvation/desolvation and electrode-electrolyte interface structure are still largely unknown due to a scarcity of surface sensitive technique.

Recently, sum frequency generation (SFG) spectroscopy has been shown to be a powerful tool

to investigate various interface structures. It also provided unique opportunities to understand the electrode-electrolyte interface structure in a molecular level.^[1-2] Ye and coworkers^[1] reported SFG study of adlayer of propylene carbonate (PC) solvent on the surface of LiCoO2 to investigate the electrode-electrolyte interfaces structure in batteries. There results, as illustrated in Fig 1. suggested that two kinds of adsorption PC species with opposite orientations are observed according to the C=O stretching region of SFG spectroscopy. In order to explain this special feature



Fig 1. (a) sps- and ssp-SFG spectra (circles) of LiCoO₂ surface in contact with PC. (b)Two possible orientation structures for C=O group of PC observed at 1780 and 1830 cm⁻¹. (c) Schematic illustration of PC absorption^[1]

of SFG and give a detail understanding of interface structure, theoretical investigation is desperately needed. By combining both experimental and theoretical investigation, a complete feature of electrode-electrolyte interface structure will be obtained.

In this work, we take PC, which is one of the typical organic solvent in batteries, as example and calculate the structure and SFG in PC vapor-liquid interface using molecular dynamics simulation. The aim of this work is to propose a general model of PC molecule and validate it by calculating PC vapor-liquid interface structure and SFG. This work will give a

theoretical understanding of organic solvent interfaces and generate reliable model and method for future application in electrode-electrolyte interfaces.

[Model and Method]

In order to investigate vibration spectra of PC, a flexible and polarizable model is required for the target molecules. Flexible model is described by nature internal coordinate, while polarizable model is described by charge response kernel (CRK) theory. CRK calculation has already been implemented into Gaussian09 program, which is readily to be applied to various systems. Force constants of intra-molecule potential are derived by fitting to the molecular hessian in quantum mechanics (QM) calculation. Partial charge and CRK are also calculated using QM at B3LYP/aug-cc-pVTZ level of theory. All parameters are nonempirically formulated and thus the accuracy of the model is directly guaranteed by that of the underlying electronic structure calculation.

[Results and Discussion]

First, bulk simulations are carried out to validate the presented PC model. The calculate bulk properties, such as density, heat of vaporization, surface tension, are in good agreement with experimental results.

In order to examine the intra-molecular potential, we calculated IR spectra in the bulk phase and compared with experimental data, as illustrated in Fig 2. The calculated results show good agreement with experimental data, especially for C=O stretching part around 1800 cm⁻¹. By implementing potential to describe C=O Morse stretching, we successfully reproduced the red-shift of C=O peak from gas phase (~1880 cm⁻¹) to condense phase $(\sim 1800 \text{ cm}^{-1}).$



Fig 2. Calculated IR spectrum of PC liquid. Inset is experimental result^[3].

The model is readily implemented into the interface calculation. By analyzing the orientational structure at the interface, it has been found that the random distribution of C=O directions break on the vapor-liquid interface. Detailed analysis of the SFG spectra, including the phase information, will be discussed in relation to the orientational structure at the interface.

[References]

- H. Liu, Y. Tong, N. Kuwata, M. Osawa, J. Kawamura, S. Ye. J. Phys. Chem. C 2009, 113, 20531–20534
- [2] L. Yu, H. Liu, Y. Wang, N. Kuwata, M. Osawa, J. Kawamura, S. Ye. Angew. Chem. Int. Ed. 2013, 52, 5753 –5756
- [3] NIST Chemistry WebBook, NIST Standard Reference Database Number 69, National Institute of Standards and Technology, Gaithersburg, MD, June 2005, <u>http://webbook.nist.gov</u>.

ヘテロダイン検出キラル振動和周波発生分光法 (筑波大院・数理物質)○奥野将成、石橋孝章

Heterodyne-detected chiral vibrational sum frequency generation spectroscopy (Graduate School of Pure and Applied Sciences, University of Tsukuba) • Masanari Okuno and Taka-aki Ishibashi

【序】新たなキラル物質の振動分光法として、近年キラル振動和周波発生分光法(Vibrational Sum Frequency Generation: VSFG)が大きな注目を集めている。キラル分子を検出・分析 する振動分光法として、振動円二色性(VCD)およびラマン光学活性(ROA)があり、たん ぱく質などの生体分子の3次元的構造に関する情報を得るために広く用いられている。しか し VCD や ROA は、電気四重極子遷移および磁気双極子遷移を用いた分光法であるため、信 号強度が極めて小さいという問題がある。また、右回りと左回り円偏光を試料に照射した際 の微小な信号の差を検出するために、微小なキラル信号は大きなアキラル信号に容易に埋没 してしまう。一方、キラル VSFG 分光法は電気双極子遷移に基づく手法であるため、大きな 信号強度が得られる。また、特定の偏光配置を用いることによってキラル信号のみを選択的 に検出することが可能である。このようにキラル VSFG 分光法は高い検出感度を持ち、これ まで単分子膜のキラリティーの検出が報告されている[1]。本研究では近年開発されたヘテロ ダイン検出 VSFG をキラル VSFG 分光法に拡張し、従来法では得られなかった分子のキラリ ティーに関する情報を得ることに成功した[2]。

【原理と実験】SFG は反転対称性が破れた系から発生するため、系が光学活性である場合に も VSFG 信号を得ることができる。キラル VSFG における重要な性質は、キラル信号を与え る二次非線形感受率 $\chi^{(2)}_{chiral}$ の符号(位相)がエナンチオマー同士、すなわち右手系・左手系の キラル分子で反転することである。信号のヘテロダイン検出を行うことによって、VSFG 信 号電場の位相を知ることができ、 $\chi^{(2)}_{chiral}$ の位相を決定することができる。これは、ヘテロダイ ン検出によってエナンチオマー同士を区別できることを意味している。

図1に本研究で開発したヘテロダ イン検出キラル VSFG 分光装置の装 置図を示す。本研究では局部発振器

(Local Oscillator: LO)として y-cut 水晶板から発生した SFG 信号を用 いた。y-cut 水晶は異方性を持つため、 キラル信号を測定する偏光配置にお いてもLOとして十分な SFG 信号を 発生させることができる。



図 1 ヘテロダイン検出キラル VSFG 分光装置の装置図

【結果と考察】開発した装置の評価のため、R-,S-リモネンおよびラセミ体を測定した。図2

にアキラルな信号を与える SSP(左から VSFG 信 号,可視光,赤外光の偏光を表す)および PPP 偏光 配置で測定して得られた虚部スペクトルを示す。 CH 伸縮振動に由来する振動バンドが観測されて いる。R-、S-リモネンおよびラセミ体から得られた スペクトルが、よく一致していることがわかる。

次に図3にキラルな信号を与える PSP 偏光配置 で測定して得られた二次非線形感受率の虚部およ び実部を示す。虚部から明らかなように、ラセミ体 からはほとんど信号が検出されていないのに対し、 R-, S-リモネンからは明確な振動共鳴信号が検出 されている。またそれらの信号は符号が逆転して おり、分子のキラリティーを反映している。さら に、PSP スペクトルは SSP および PPP スペクト ルと形状が全く異なっており、PSP スペクトルが、 アキラル信号の「漏れ」でなく、キラル信号であ ることを示している。このように、キラル VSFG 信号をヘテロダイン検出することで $\chi^{(2)}_{chiral}$ スペク トルを位相を含めて決定し、エナンチオマーを区 別することに成功した。なお、測定データを感受 率スペクトルに変換する際に、キラル信号の由来 が界面かバルク相かということについての情報 が必要である。これは、電気双極子近似ではバル ク相に由来する SFG 信号電場と界面に由来する SFG 信号電場の位相がπ/2 異なるからである。本 図 3 PSP 偏光配置で得られた 研究ではキラル信号がバルク相に由来するとい 二次非線形感受率の虚部(上)および実部(下) う仮定に基づいて解析を行い、図3の結果を得た。



図 2 SSP(上) および PPP 配置(下)で 得られた虚部スペクトル



得られた虚部を見ると、振動共鳴に由来するバンドが観測されており、実部には分散形のス ペクトルが得られたことから、先の仮定が正しいことが示された。すなわち、反射配置でリ モネンから得られたキラル VSFG 信号は、界面ではなくバルク相に由来する、ということが 見出された。これは信号電場の絶対値二乗を観測する従来法では得られない情報であり、本 研究で初めて得られた情報である。さらに、ヘテロダイン検出を行うことによって検出感度 の大幅な向上に成功した。従来のホモダイン法では反射配置、非電子共鳴条件下でリモネン からのキラル信号を得ることは非常に困難であった[3]。本研究では同様の条件で、十分な信 号/ノイズ比を持ったキラル VSFG スペクトルが観測されている。これは、適切な強度の LO によって微弱なキラル VSFG 信号が増幅された結果である。

【参考文献】

- [1] M. A. Belkin and Y. R. Shen, Phys. Rev. Lett., 91, 213907 (2003).
- [2] M. Okuno and T. Ishibashi, J. Phys. Chem. Lett., DOI: 10.1021/jz501158r.
- [3] M. A. Belkin, et al., Phys. Rev. Lett., 85, 4474-4477 (2000).

新しい界面選択的非線形分光の開発と展開

(理研・田原分子分光、理研・光量子工学領域) 〇田原太平

Development and Application of New Interface-Selective Nonlinear Spectroscopy

(Molecular Spectroscopy Laboratory, RIKEN, and

Ultrafast Spectroscopy Research Team, RIKEN Center for Advanced Photonics (RAP))

Tahei Tahara

2つの異なる相が出会う界面はバルクと異なる様々な分子現象が進行する場であり、界面の静 的・動的性質を分子科学的に理解することは重要である。中でも液体界面の基礎的理解は、電気 化学、大気化学、環境科学など多くの分野の知的基盤として重要であるが、溶液中の分子の理解 に比べると未だ著しく劣っている。この大きな理由の一つはナノメータオーダーの液体界面の分 子をバルクの分子と区別して計測する方法論が限られていることにある。偶数次の非線形分光は 双極子近似の基で反転対称性の無い領域でのみ信号を生じるため界面選択的である。非線形分光 による界面の研究は 1980 年代に Y. R. Shen とその共同研究者によって開始され、電子スペクトル 測定には二倍波発生(SHG)法が、振動スペクトル測定には振動和周波発生法(VSFG)法が、界 面研究の強力な手段として広く使われるようになった。しかし、われわれが界面研究を始めた 2000 年初頭には技術的に飽和し、停滞した感があった。

我々は、①液体界面の現象は重要であるにもかかわらず未解明の基本的問題が多い、②界面分 光は溶液の分光に比較すると未発達で得られる情報が乏しい、逆を言うと伸びる余地が多くある、 と考え、2004年頃に非線形分光による液体界面研究を開始した。そして、それまで溶液の超高速 分光の研究で培ってきた分光技術を界面分光へ応用することで一群の新しい非線形分光計測法を 開発し、それらを用いて液体界面の基本的な分子現象の研究を行ってきた[1,2,3]。

マルチプレックス電子和周波発生分光法およびその発展測定

我々が研究を開始した時点でVSFG 法を用いた界面の振動スペクトル研究は数多く行われてい たが、電子スペクトルによる研究は少なかったので、まず電子スペクトルによる界面研究から始 めた。当時用いられていた SHG 法では狭帯域のパルス光の波長を掃引しながら界面で発生する 二倍波の強度を測定することで界面分子の電子スペクトル測定を行う。しかしこの方法では測定 に長い時間を要し、また質の低いスペクトルしか得られない。そこで、フェムト秒の狭帯域パル スとフェムト秒白色光を同時に試料界面に照射することで和周波発生を広い波長領域で行い、こ れを分光器とマルチチャンネル検出器で一度に測定する方法を考案し、電子和周波発生(ESFG) 法と名付けた。この ESFG 法によって S/N の高い界面選択的な電子スペクトルを短い測定時間で 得ることが可能になった。ESFG 法よって、例えば、空気/水界面での溶媒和発色を定量的に測 定し、界面の溶質分子はその配向の違いによって水との相互作用が異なり、このため同じ水表面 にありながら実効的に異なる極性を感じていることを明らかにした。さらに、ESFG 法による時 間分解測定、4 次非線形分光による振動スペクトル測定を実現した。

ヘテロダイン検出電子和周波発生分光法とヘテロダイン検出振動和周波発生分光法

ESFG 法によって、VSFG による振動スペクトル測定同様、界面分子の電子スペクトルを良い

S/N で得られるようになった。しかしながら、界面からの非線形分光信号の強度をそのまま検出 するこれらの方法では、界面分子の性質を表す二次の非線形感受率 $\chi^{(2)}$ ではなく、その自乗 $|\chi^{(2)}|^2$ のスペクトルが得られるに過ぎない。分子の遷移エネルギーを正しく議論するためには、 $\chi^{(2)}$ その もの、特にその虚部($Im\chi^{(2)}$)のスペクトルを測定する必要がある。 $\chi^{(2)}$ の測定は、界面で発生す る信号光の電場の振幅と位相を、参照光との干渉を利用して検出することで行うことができる。 このヘテロダイン検出と呼ばれる測定は狭帯域光を用いては行われていたが、それまでほとんど 利用されていなかった。われわれはフェムト秒の広帯域光を用い、信号光と参照光を同軸状に発 生させる光学配置を採用することで高い位相安定性を実現して、ヘテロダイン検出をまず ESFG 測定について次に VSFG 測定について行った。これによって、紫外可視吸収スペクトルおよび赤 外吸収スペクトルと直接比較出来る界面選択的な電子スペクトルと振動スペクトルの測定が可能 となった。そして前者を用いて、水表面の pH の定量的な検討や非共鳴バックグラウンドの起因 の解明を行い、また後者によって帯電界面の水の配向の観測、帯電界面および空気/水界面の水 の構造の解明、生体膜モデルの脂質/水界面の水の構造の議論など、液体界面の基本現象につい ての新しい知見を得た。このヘテロダイン検出による ESFG 法 (HD-ESFG 法) と VSFG 法

(HD-VSFG法)は従来法に比べると技術的に高度であるが、分光学的にはより本質的な量を測定している。われわれの開発した方法は現在世界的に広がりつつあり、今後の標準的な方法になると考えている。

フェムト秒時間分解測定への拡張

HD-ESFG 法と HD-VSFG 法の開発によって、 $\chi^{(2)}$ 、特に Im $\chi^{(2)}$ スペクトルが測定できることに なったが、これは時間分解測定にとっても大変大きな意味を持つ。時間分解測定では、光励起に よって誘起される分光信号の変化を光励起とスペクトル測定の間の遅延時間を変化させながら測 定する。従来の SHG 法、VSFG 法を用いても時間分解測定は行われていたが、これによって観測 される量は $|\chi^{(2)}|^2$ の変化、すなわち $\Delta|\chi^{(2)}|^2$ =2Re $\{\chi^{(2)}\Delta\chi^{(2)*}\}+|\Delta\chi^{(2)}|^2$ であって、このスペクトルを 正しく解釈することはきわめて困難である。これに対しヘテロダイン検出を用いた時間分解測定 では $\chi^{(2)}$ の変化 ($\Delta\chi^{(2)}$) そのものを観測でき、その虚部 (Δ Im $\chi^{(2)}$) は時間分解吸収スペクトル (Δ Im $\chi^{(1)}$) と直接比較することが出来る。

そこで我々はヘテロダイン検出による定常スペクトル測定を実現してすぐ時間分解測定を目指 す研究へ進み、水界面における HD-VSFG の時間分解測定を実現した。まず、赤外光による振動 励起によってフェムト秒振動ダイナミクスを観測することで、帯電した水表面の OH 伸縮振動バ ンドの不均一性とスペクトル拡散を観測し、また空気/水界面の3つの異なる OH 伸縮振動の強 い結合を示すデータを得た。また紫外光による電子励起を組み合わせることで、水のイオン化に よって水表面に電子を放出させ、水表面に過渡的に生じる水和電子を観測することに成功した。 これらは溶液中で行われている最先端の超高速分光と同水準の実験であり、われわれの開発した 新しい非線形分光法によって、少なくとも空気/液体界面については界面分光のレベルが溶液の 分光のそれと同等になったことを意味している。

講演では、これらの方法論の開発とそれの利用によって得られた結果について総括するととも に、今後の展開の可能性について議論する。

[1] Yamaguchi and Tahara, Laser Photon. Rev. **2**, 74 (2008). [2] Nihonyanagi et al. Ann. Rev. Phys. Chem. **64**, 579 (2013). [3] 田原太平、界面選択的非線形分光法、界面の分子科学(日本化学会編)、化学同人(2011).